

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

ゆき女

佐藤家の昔話（十）

編 武 田 正

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

ゆき女

佐藤家の昔話(十)

編 武 田 正

ゆき女

佐藤家の昔話（十）

- | | | | | | | | | | | | | |
|------|-----|------|-------|----------|----------|---------|-------|--------|-----|----------|-----|------|
| 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 | 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 和尚は鯨 | 赤い兎 | 大黒頭巾 | 鹿毛と熊毛 | 小白川の地蔵さま | ごんごさまの由来 | あくぬけの由来 | 沼神の手紙 | うるしかき竜 | 化け石 | 弁天さまと六地藏 | 猿地藏 | かつこ鳥 |

36 34 32 31 28 26 25 20 18 15 10 6 5

28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14

百姓と侍

百姓と壁屋

無筆の知らせ

目なしという魚

めくらとつんぼ

司馬温公と韓信

義経の毒矢

こたつの由来

灯籠の由来

万蔵さん

ゆき女

まえたけ

夜這い話

鬼六ばなし

眼の薬

あとがき

69 66 64 62 60 56 55 53 50 49 47 45 43 40 39 37

凡 例

- 一、テープにとつたものを翻字した。
 - 二、語りの順に配列した。
 - 三、手を加えず、語りそのままとした。
- (テープは51年2月11日のものである)

1 かっこ鳥

458

かっこは鳴いで血吐くほど鳴かなねていう話あるんだげんども…。

かっこ、そもそもがモズの巣さ卵産されるんだど。ほしてモズの卵、みな放つて、ほしてはあ、自分だけが残るんだど。

はいつ知しやねでモズ夫婦が、温めつくわけだ。温めついているうち、むしよげてくるわけだなね。はいつがだんだえ、だんだえ大きくなつて、親二匹して、餌^{もの}食せるに大変だて、ほして見つど、何だか自分だと格好ちがつてきて、

「格好ちがう、格好ちがう」

て、へカッコ、カッコ〜ていうのを聞きながら育つ、ほして巣立つ頃には、まず親よりも大きくなつてはあ、ほしてはあ、何にも聞かねで、へカッコ、カッコ〜ていうもんだから、その言葉しか憶えないで、

「格好悪^{わる}れなあ、格好悪^{わる}れなあ」

ていうへカッコ、カッコ〜しか憶えないで、鳴くには、やっぱり教えらつた「カッ

コ、カッコ」て鳴くんだと。

どんぴんからりん、すっからりん。

2 猿 地 蔵

459

むかしむかし、じんつあとばんちやいで、ほして山畑、いっしょうけんめい耕していた。

ところが山猿出て、さつまいもも大豆でも何でもみな、ほの、にどいも（ばれいしよ）でも小豆でも猿にやつつけられる。隣の家では稼とぎ人いっぱいいたから、猿ば、ハジキ拵えたり何かえしたり、追ほつてやることできつけど、じんつあとばんちやばりだから、猿ば追わんねがった。ほんでも、ほれ、

「みな猿に食かつでしまったんでは暮さんね、ばんちや。んじやなぜかええ方法ないんだべかなあ」

「じんつあ、じんつあ、仕方ない、悪れげんと、んだらばおれあ、あの、地蔵さまの帽子しやつぽと、地蔵さまの錫杖しやくじやうどを拵けえで呉けつから、地蔵さまになつて立つて見たらええがんべな」

ばんちや教えたど。

「ばんちや、はいつあええ考えだな」

というわけで、山さ行つて地蔵さまの格好して立っていただれば、猿だたまげたど。

「いやあいやあ、地蔵さま、こだんどこさおいでなさるなて、こりや、お堂おださ入れんなね」

て、ほして、ほのじんつあば猿いっぱい来て、立ってだじんつあばかついで、こんどは、川、舟さのせて行つたど。舟さのせられつどぎ、重なつたんだど。かさなつたのさ、突張り掛つたのが千両箱だつたていうんだな。

ほして、ずうつと行つて、お堂なてないもんだから、猿だ一生けんめい、木折おだつてきたり、草むしつてきたりして、簡単なお堂拵けえで、ほのじんつあば、ほこさ

祀ったて。ほして、重なったまんま、突張りかったまんま祀ったて。ほして猿あ
いねぐなつたから、じんつあ、こうして見っただれば、おつかがつていたのは、千
両箱だつて。

「こりや大したもんだ」

というわけで、そいつ失敬してきたとはあ。ところが、ほれ、こんどすばらし
い金持ちになったもんだから、

「なして隣で、あだえ金持ちになったべえ」

て、隣のじんつあ聞きにきたど。したば、

「こういうわけで、おれあ山さ地蔵さまになつて、地蔵さまの帽子かぶつて、木
の錫杖ついんだれば、お猿さんだいつばいきて、お堂さ入れんなねて、おれば連^せて
行つて、突張り掛かた。突張りかったのが千両箱で、はいつ失敬してきたっだなあ」
て語ったど。

「ほんでは、おれも」

というわけで、山さ行つて立っていただれば、

「ありや、りや、またここさ地藏さま出つだ、こりや」

て。

「ほんでは、お堂さ入れらんなねっだなあ」

て、猿だ、いっぱい集まつてきて、ほしてじんつあば舟さのせて、ほして連^せて行つた。あんまり面白いので、じんつあ笑つたど。アハハ、ほしたれば、

「こりや、地藏さまでない」

ていうわけで、川の真中で川さ入れらつだんだどはあ。ほして、ほうほうの体でもどつてきたつて。

ほして、猿だ、つねがね、ほのじんつあ、追つてばりいて、さつまいもだ、何だつて猿さ食せねがつたわけだど。んで、そういうこともあつたべていうわけで、川さ、ただ入れらつて、川から、ほうほうの体で、やつと上がつて来たつて。ほして、人の真似したつて分んねもんだなあて言うたつたて。

どんぴんからりん、すっからりん。

3 弁天さまと六地藏

460

むかしむかし、じんつあとばんちやいではあ、年寄ったもんだから、何にも仕事ないほで、カセ玉つくりしたど。ほして冬きて、いよいよ年とりになったげんども、まず、ほれ、菜漬けと御飯ぐらいしか、何もない。

「困ったもんだ、何か、魚でも買ってくるいように、カセ玉でも売ってくるべ」
て、町さ出かけた。

ところが、商売人拵えたカセ玉でさえもそう売んね、素人拵えだ、特にじんつあ拵えたカセ玉なて、中々売んねがつたつて。

ほしたれば向うから、笠持たがった人きたつけど。ほの笠持ってきた人も、ほれ、素人拵えた、はいつもじんつあだも、ほれ。ばんちやと二人で、笠せつせと拵つて、そこは餅米もなくて、餅もさんねくていたじんつあ、笠売りにきた。町中廻つて歩いてきたげんども、笠一蓋かいも売んねつて。

「困ったもんだ」

て、二人はそこでばったり合つて、ほこで話語つたつて。

「いや、おれあ笠売り来たげんど、一つも売んねず」

「おれあ、実はカセ玉売りにきた。さっぱり売んね」

「ほんでは、売んねなど、売んねな交換してみんべ」

て、ほこでカセ玉と笠と交換したんだとはあ。ほしてカセ玉持つて行つてたじかつあが笠かついで、笠かついんだじんつあがカセ玉背負つてはあ、おのおの、
「ええはあ、仕方ない。家さでも行くべはあ、笠でも持つて行つてはあ、こりや家さ行ぐど、何年と使えんべし」

「家のばんば、年寄つたげんど、カセ玉でも髪かざりすつど、ええ女になんべえな」

さて、二人は別つだどはあ。ほうしてきたれば、ほれ、雪あ降つてきた。村はずれまできたれば、地蔵さま立つてだ。地蔵さま、寒いようで、寒いようで仕樣ないから、その笠全部かぶせてはあ、家さ戻つてきた。

一方のカセ玉持つて行つたじんつあ、村はずれの弁天さままで来た。ほしたら

弁天さまの髪格好はええから、

「かいつ、ばんちやさばりでなく、弁天さまも一つ納めて行くべ」

というわけで、ほの弁天さまさ納めた。

ところが、納めてお詣りしてくんべと思つたれば、何だか、何かさ引掛かたみたいで来らんね、おかしいもんだと思つて、くんべと思つたら、弁天さま、口立つて、

「待っていらつしやい」

て言うたど。ほしたけあ、何だべと思つたれば、

「こいつあ、木で拵えた枺だ。^{ます}んだげんども、この枺は、いっばいなの出ねげんど、お前の家で食うだけは、おれさ、カセ玉納めて呉だお礼にお上げる枺だ。この枺はお前だ食うだけは、何たも^{なん}んでも願つたものは出つから、この枺さ願わつしやい」

て、言^やつて、ほの枺もらつて、じんつあ喜んで、家さ帰つてきて、

「ばんちや、ばんちや、実は、こういうわけで、笠さっぱり売んねがった。ほし

て、カセ玉売りどはあ、破れかぶれで、取換え^{しかえ}できたったはあ。村はずれまで来て、弁天さまさ上げた。ばんちゃさカセ玉上げつかと思つたげんども、弁天さま思い出して、弁天さまさ帰り廻つて、カセ玉納めだれば、来つと思つたればおさえらつだ、弁天さまから……。何だと思つたれば、この杓もらつてきた。ばんちゃ、ばんちゃ、願つてみる、まず」

ていうて、二人して、ほれ、

「ほんじゃ、餅米呉^けてけらつしやい」

ていうど、餅米はそくつと二人して食うほど出る。ほれあ、お魚ていうどお魚出る。人さ売ったり、呉^けたりするほどは出ねげんど、二人が一生樂に食うほど出だつたど。

して、一方、こっちの方は「笠地藏」と同じように、地藏さまさ、あんまり寒いようだからて、みな笠かぶせてきた。

「ばんちゃ、ばんちゃ、こういうわけで、カセ玉売りに行つたげんども、カセ玉売んねくて、売んねくていたれば、向うから笠売りきたつけ。その笠と取換^{しかえ}だはあ。

ほして来たれば、村はずれに地蔵さま、あんまり寒いようだけながら、かぶせてき
たずはあ」

「ああ、ええどこでない。じんつあ、はいつあええがつた。んでは、今夜はクキ
菜でも煮てはあ、まずはあ、寝んべはあ、ばんちやなあ」

ていたれば、晩方、

「じんつあ家あ、ここだ、んねがい。ばんちや家は、ここだ、んねがい」
て、表で音あする。どつどつどつて、足音する。

「なんだべ、恐ないもんだな、ばんちや」

て、語ってだつて。おそるおそる戸開けてみたら、米俵だ、何だて、どつさり
地蔵さまの格好しつた、笠かぶつたないっぱい来て、置いて行つたどこだど。ほ
してはあ、楽々暮したつたはあ。

どんぴんからりん、すつからりん。

4 化 け 石

461

むかし、この生居（上山市）のしくじりき、〈化け石〉ていうなあった。ちやうど高さは二米ぐらいで、上の方五、六十センチぐらいの石で、夜な夜な、ほの石が化けて、子どもをおどしたり、ほら、持ちもの取ったり、いろいろすかったど。

ところが、あるとき、庄屋の権左衛門が町き用達しき行つて、したれば、
「お頼^{たの}申します。お頼申します」
て。

「ふしぎなこともあるもんだ、夜中に女の声する」

て、ちよえつと振り返つて見たれば、きれいな女だったて。ほして権左衛門も生身^{なまみ}だからその氣になったげんども、

「待て、待て、これは何か妖怪変化、ここは特に〈化け石〉て言^やつでいっこだ」
ていうわけで、まず心落着けて、どかっと道端さ尻したえで、煙草入れ出して、

一服吸い始めたど。したれば、その女は、見たれば着物の縞まで、すかつと、真暗いどこに見えるていうんだな。

「こだなわけない」

ていうわけで、悟ったんだど。ほうして、何だか背筋がぞくぞくつてするよう
な氣して、なれ、

「はあ、これは、妖怪變化、狐か狸か、何かでないべか」

ていうわけで、したれば、

「実は、おれの子どもが増えすぎて、何とも困つからて、食料めぐんでもらいた
い」

て、こういうわけだったど。

「よし、めぐんでやる」

ていうわけで、いそいで家に帰つて、ほして家の若衆ださ、米一俵（昔は三斗七升だったど）、三七の米全部炊かせて、ほれ、ヤキメシ握つて、ゴマヤキメシ、キナコヤキメシ、ほうして持つて行つたれば、ほの石のかげから手あ何十本とな

く出て、たちまち食つてしまつたんだとはあ。ほのヤキメシ。ほうして、
「庄屋さん、庄屋さん、どうもありがとうございました。お礼に宝物の石^け呉でや
ります」

て、石ナシコ二つ呉でよこしたんだど。こいつは〈子持ち石〉ていうて、毎年
一つずつ子産^なすんだつて。ほして、はいつもらつてきて、中庭の池さ入つていだ
れば、やつぱり一年に一つずつ子産^なす、生石^{なまいし}なんだど。はいつ聞いた殿さま、
「ほだな、百姓、町人ざ持たせておかんね、おれんどこさ上げろ」

ていうわけで、上の山の殿さまに持つて行がつたんだど。

持つて行つたげんど、一晚のうちにちゃんともどつてくるんだど、ほの石あ。
なんぼ持つて行つても戻つてくる。殿さまも気味悪くなつてはあ、書付け一本呉
ではあ、〈生石大明神〉ていう書付け呉て、ほしてはあ、返してよこしたんだどはあ。
今でも、大事にしていって、生石というのが、訛つて、〈生居^{なまい}〉になつたんだあ。
生居部落ていうのが、元、〈生石〉ていうのの名だつたど。生居の由来だど。
どんぴんからりん、すつからりん。

5 うるしかき竜

462

むかしむかし、秋田の国に、漆かきの兄弟だったど。兄と舎弟。

ところが、山の中さ、うるしかきに行ったらば、兄がきれいな渕ながめてみると、

「ここらで、喉かわいたから、水でも飲んでみつか」

というわけで、飲んでいたれば、ほしたれば、渕の底さ、うるしの塊が沈んでいんだど。

「ははあ…」

はいつ、兄んつあ、舎弟さ呉^けんな嫌^やんだくなつたんだどはあ。ほして、とっさに考えて、丸太伐つて、ほの丸太で竜の格好刻んだんだど。ほして、はいつ、そろんと、ほこさ浮かしたんだど。ほして自分ばりくぐつて行つて、ほのうるしかたまりの塊、とつてきたんだど。ほうしてはいつ高く売つて、兄んつあ、いたどこだ。

舎弟は、ほだごど知しやねし、木うるしばっかりかいて、たんと（多く）かか

んねがったわけだったなね。

ほうして、水飲むべと思つて行つたらば、竜いたわけだずも、ほこに。いや、ぶつたまげて舎弟は水も飲まねでもどつてきたわけだ。そいつ聞いた兄んつあ、

「しめ、しめ……」

て、自分ばかり、ほれ、うるしの塊、洩の中から取つてきてはあ、すばらしい錢にしたわけだど。

あるとき行つたら、ほの竜あ、生きて、なれ、兄んつあ食^かつでしまったんだどはあ。

んだから、自分ばり抜けがけざあするもんでない。兄弟ざあ仲よくさんなねもんだて、世間の人あ、みなそういう風にいうたつたて。

どんぴんからりん、すつからりん。

6 沼神の手紙

463

あるところに、働きものの娘いだったんだ。

かいつが、ほれ、家が貧しいから、遠くさ女中に借さ^かつたんだ。

ところが、たまたまおかちゃんが病氣だていう便りもらつた。すぐ来い……て。
んではというわけで、旦那行つて、

「こういうわけだ」

て話したれば、ほつから急いで帰つても、まず三日。行き帰りでは六日かかるのだ。はいつが、急いで急いで。普通だど一週間かかんのだ。

ところが、ほこの旦那、

「一週間目に帰つてこねごんだら、三年も稼いだな、日料^{ひりょう}、棒引きだ」

てだ。ほして、よくよくソバ代ぐらいあずけて、小づかいも呉ねでよこしたわけだ。んだげんど、ほれ、おかちゃんさ会うだくて、一心にきたわけだ。

ところが、峠近くまで来たれば、道さはだがつてた者（立ちほだかつた者）い

たんだど。何だと思つたらば、

「おれは、ここの蛇だ」

て、だど。

「お前ば、いま一呑みにするのは雑作ないげんど、実は、この前、おれの兄弟分
から、お前みたいな、うまい食いものもらつたから、女の若い娘もらつたから、
お返しすんなね義務あるんだ。んだから、おれ、手紙書いてやつから、お前、は
いつおれの兄弟分のどこさ持つて行げ」

て、こういうふうに言うたわけだど。ほしたれば、

「まずはあ、おれは、おかちゃんと会わねで死なんなねっだなあ。こりや、どつ
ちにしても吞まれるはあ」

て思つたど。

「困つたこともあるもんだなあ」

て思つて、ほして一生けんめい行つたれば、また一つの大きな峠あつけど。

「あそこの峠で、おれは吞まれるんだなあ」

て、行つたんだそうだ。ところがほこに、ちよえつとした祠みたいなあつて、何だと思つたれば、ほこさあんのは天神さまの祠だったけど。

「ここさ、ちよつと休ませてもらつて、天神さまでもお詣りして、お願いしてみつか」

て思つて、ほこさ廻つたれば、ほの、天神さまはほこさいてよ、

「お前、手紙あずけらつてきたべあ」

て、お見通しだけどはあ。

「ほだ」

「ほの手紙、よこせ」

「んだて、殺されんも」

「ええ、ええ、おれあええあんばいすんのだから、おれは神さまだから、くねね（かまわぬ）」

ほれ、天神さま、こんどは手紙書き換えて呉だんだど。

「この者は、稼がせらつてばいいで、よくよくうまみがない。むしろ、うまいど

ころか、つうと（少し）毒気もある。あんまり稼いでばりいたから、やせぼげで。
んだから、はいつをうまくして食うには、金子なの与えてやれ、んだど、うまい
もの食って、かならずこの娘はここ戻ってくつから、ぽこぽこ肥^{ふと}ってきたどこ食
うとうまいであろう」

て、手紙書き換えて呉たど、天神さま。

ほして、はいつ持つて行つたれば、やつぱり峠さあらわつで、

「どこへ行く」

「こういうわけで、あなたの兄弟分から手紙あずかつてきた」

「どれどれ、こつちやよこしてみろ」

ほしたれば、

「何だ、今すぐ食べらんねのが、なんだ金子なの持たせてやれて書かった、ほう
か仕方ない、ほんでは、帰りにここ通つか」

「はい、必ずここ通ります」

「ほうか、よし、んだらば」

ていうわけで、小判、どっさり背負わせだどはあ。ほして、

「あと、いらね」

ていうげんども、

「いや、駄目だ、ええ体にならねから、皆持つて行げ」

ていうわけで、どっさり背負わせらつで、ほっから家さやつと、よたよたていうほど銭背負わせらつではあ、家さ行つたつて。

こんどは、銭いっぱいあつから、帰つてなの行かねつたてええがつたなはあ。ほして、おかちゃんの病氣治して、ゆうゆうと暮らしたつたど。

昔とんとん、どんぴんからりん、すっからりん。

7 あくぬけの由来

464

隣の酒屋での話。

ところが酒の元もとていうな、何かどんぐりからとったという話あるんだな。ほして、ほいつで寒水汲んで、すばらしい大きい桶さ、宮川から寒水汲んで、わらじ履きで、若衆たちかつぐんだったずがらな。酒倉さなあ。

何調合間違えたか、モロミのとき酸っぱくしてしまったんだ。ほうしたれば、ほれ、旦那、ごしやえで、

「にさ（お前）なの、出はって行げはあ」
ていうわけで、追出ほださったわけだ。

「おれば出はって行げなて言うごんだらば、ええ」
ていうわけで、みんな寝静まってから、囲炉裏の灰、みな入ってしまったんだ。モロミさよ。ほしてはあ、

「あっじやなもの（あんなもの）、おれ、みな飲まんねぐして呉だはあ」

ていうわけで、出て行くとき、腹いせにそういう風にして出て行っただど。

ところが、飲まんね勘定して、それからずうつと経ったんだど。旦那行ってみたら、すうつと、酸っかくなつたの、灰で中和してはあ、モロミがすうつと澄んで行つて、上さ、みな澄み酒になっていだけて。ほして久しく置いだれば、その灰気、みな抜けだつたていうわけだ。灰抜けして、すばらしくおどろいたていうわけで、その杜氏ば呼び返したていう話あるんだ。〈灰抜け〉ていう言葉は、〈どぶろく〉から来た言葉だそう。

8 こんごさまの由来

465

こんごさまの由来話。ばんちやとおかちゃんのことを、〈こんごさま〉ていう。むかし、阿古屋姫が山形からきて、松の精と恋仲になって、それから男めとらねでしまったど。んだげんども、琴はひく、唄はやるで、非常に優雅な家庭に育つ

たもんだから、はいつ習いに行く人がいっぱい居だんだつたど。

んで、ほれ、ほこさ習い行ぐつたつて、普通は水呑み百姓では行かんねし、相
当の資産家とか旦那衆とか武家の奥さんとか習いに行つたんだど。習いに行くと
き米一升ずつ持つて習いに行つたもんだど。昔は銭なてほだえないもんだから。

ところが、ほれ、

「一升ずつでは大変だから、五合ずつでええから」

て、米五合持つて行くことになつたんだど。

んだから、ほの、米五合もつて、阿古屋姫さ出入りされる人が、いわゆるその
当時はすばらしい地位にあつた人だ。結局、あがめた言葉が〈ごんごさま〉だど。
んだからその当時の〈ごんごさま〉ていうど、すばらしいおかちゃんであり、ば
んちゃであつたつて。どんぴんからりん、すつからりん。

9 小白川の地蔵さま

466

小白川（山形）にある夫婦がいて、少し離ったところにとうちゃんが稼ぎに行つてだど。ところが、そのおかちゃんばりのどこさ、六部が泊った。ほしていろいろ話になって、

「ええ体格でござるな」

だの、何だのて、まず、話になった。ところが、

「奥さん、実は困ったこと、おれ、あるんだ。まず大きい過ぎて相手になる人がいねんだ」

ていうわけだど。

「はあ、んだら、おれ聞いた話だげんど、大きい人と相手になつどきには、麦ば煮立てて、麦のり打^ぶって、麦のり温めて、そいつさ浸^たしてすつど、用達^たすいそ^うだていうこと聞いた」

ということだど。ほして二人は、ほれ、麦のりとして入れてみたら、ソロッと

ええあんばい入ったど。ほうしたけあ、

「まず、こだえ、ええことないがった」

というわけで、その六部さま、すばらしく感謝して、

「んじや、来年また、おれ、ここ通つから、来年まで待^まてでくろ、また来つから」
というわけで、言い残して出かけたわけだど。ほうして隣の隣の部落あたりさ
行つて、誰^やさも言ね約束したんだげんど、あんまりうれしくて、ほこで話になつ
たずも。ほれ。ほして稼^やぎ行つてゐるおつつあまが聞いてみつど、何だか自分のか
かみたいだでえ、一人ばりいた、こういう女で、て聞くどよ。

「何だ」

というわけで、ごしやげではあ、いらんねくて、ぐらり家さ来て、おつかさ、

「この一升瓶さ、一升五合の酒買つてこい」

というたど。

「何だべ、とうちゃん。一升瓶さ五合買つてこいだらわかつたげんど、一升五合
ざあ話あるもんであんまいな」

たれば、

「なんぼも入る。麦煮立てて麦のりとして、麦のりさ酒ひたすど、なんぼも一升五合入るべ」

はいつで、かか、分らっだと思つてはあ、自殺するんだどはあ。ほしてはいつ、こんど一年過ぎて、坊さま、その土地さ来てみたればいねんだけどはあ。

「なしていねべ、こらあ」

て聞いてみたれば、

「何でも、六部さま泊つて、ほの六部さまと関係もつて、亭主はヤキモチやいではあ、まず何とも仕様なくて、自殺したんだどはあ」

ていうたんだど。

「ああ、ほんではおれ悪れごとした」

ていうわけで、ほの人が立てて呉た地蔵さまが小白川の地蔵さまだど。んだから小白川の地蔵さまが非常に道祖神さまに似てる地蔵さまになつてゐるんだど。

10 鹿毛と熊毛

467

ある村に非常にきれいな娘いて、ほの娘がかわら毛だてという話あったんだ。

「いや、ほんねべな」

「ほだべな」

て、若衆だ論判になって、

「んだらば、お湯さ入っどきみんなして見に行んじや」

ていうわけで、隠つで見つだんだ。ほうしてお湯さ入っどき、つやつやと真っ黒だずもほれ。

「ほれ、真っ黒だどれ！」

て、みないうたんだ。ほしたらば「かわら毛だ」ていう人だよ、

「あいつあ、しかけ（仕掛け）だまなあ、しかけあんなだまなあ」

ていうた。ほしたれば、その娘あ、

「鹿毛でない、熊毛だ」

ていうたど。熊の毛だつたど、そいつあ。

11 大黒頭巾

468

あるところに、ちよんちよこ大きくて、何とも仕様なくて、腹からずうっとして、肩から、まだ出はんのだつたど。出はつから何とも仕様なくて、こいつさ、地藏さまの頭巾みたいなかぶせて歩くのだつたど。

ほしてある時、ほれ、山畑、いっしょうけんめい頭巾うなコかぶせて耕うなつたれば、トコトコ、トコトコ、ほこさ若い娘来たけあ、

「おつつあん、おつつあん」
て聞いたど。

「おかちゃん、逝くしたが」
てだど。

「なして」

ていうたらば、

「おぼこ負^{うぶ}つて、畑^{うぶ}うないなのしつたからよ」

ていうわけだど。

「いや、はいつあ、おぼこでない、ちよんちよこだ」

ていうたど。

「ほうか、ほだえ大きいなか。実は、他でもない、おれも大きくて、おれなど合
う人いねべかと思つて、さすらいの旅してきたんだ」

ていうわけだずも、ほれ。

「ほんでは、合せてみつか」

ていうわけで、まず道のかげさ行つて、藪からで合せてみたど。ほうしたれば
大きいもんだから、音出したずも、ほれ。

「にやり、にやり」

て、音したつて。ほうしたれば、馬車ひきは、

「ああ、荷物はこっちだ」

て、行っただって。ほしたれば、人のけはいしたもんだから、いきなり抜いたれば、

「セトン！」

て音したていうんだな。

「ああ、瀬戸物はぼっこれやすくて駄目だ」
て、もどったって。

12 赤 い 兎

469

こいつは実話でふしぎな話で、今もってふしぎでなんねえて、友だちとみんなして語っている話だて、家のじさまだ語り語りした。

ある沢さ、兎追い行っただど。友だちだ、春、堅雪になつてから、藁仕事ば

りしったてはあ、飽きたもんだから、コシキベラ持たって、兎追い行たったて。ほうしてみんなして、沢から行たったれば、赤い兎あパッパッ、パッパッと走はって行いったていうんだな。赤い兎だずも。

「あらら、赤い兎だ、赤い兎だ、あらら」

ていうたらば、何だかほの原っぱのどこの小藪みたいなどこさ、ちよちよとくぐったんだど。

「ああ、ここさ入いった、ここさ入いった」

というわけで、コシキベラで掘ほってみたら、中から人の死体出ではてきたんだど。ほしたらば、ほいつ相あい生おい(上山市)の人が逝はくなつて探たっていたんだつたど。

昔のことだから、かかさわりなつどなんねえから、黙もっているはあて、みんなして固かく口どめしてはあ、行いったていうんだな。「雪消えつどわかつから」てよ。

13 和尚は鯨

470

お寺が、あんまり精力ありすぎだったか何っただかで、とにかく、「嘘こくど鬼に舌抜かれる」だの、「因果応報」だのて、娑婆にいつどき、悪れごどしたときは地獄さ行くだの何だのて、んだからこんどは地獄さ行かねようにするにや、何もあげろ、かにも上げていうたつて。

ところが、ある人、

「お寺さま死ぬど、鯨になる」

という人いだんだど。

「ほう、なして鯨になる」

というたれば、

「お寺さまざあ、みんなから集めて食っているんだ。んだから、鯨ざあ一人に食れるもんでない、みんなから食れるもんだから、結局、ほのお寺さまざあ、死ぬと鯨になって、みんなに分けて食れんなだあ」

お寺さま、〈因果応報〉ていうたから、

「そんなもんだべえ」

て言^やつで、ほれからお寺さまもはあ、あんまり横暴にしねがつたてだな。
どんぴんからりん、すつからりん。

14 百姓と侍

471

むかし、百姓が田植えしたんだ。したれば、

「これこれ、百姓、お前だ、一反歩さ何ぼ株、突っこむなだ」
て。ほしたれば、廻りきた侍言うた。ほしたば、

「おらだは、何ぼ株突っこむんだか、一々わかつけんども、お侍さま、一里の道
なんぼアゴだか分つか」

ていうて、ほして、

「ははあ、ほうか、百姓もこだえ馬鹿だ馬鹿だと思つたれば、こういうこと考えでいっか。一坪さ五十株だから、三百坪だから一万五千株、おらだ植えつさえすつど、一日の請けとりきまりなだ、先には一人、一反歩だつたずもな」

んだから、はいつ勘定してすつどはあ、田植、決まんのだはあて、して一里の道さあ何ぼアゴだかわかんなくて、歩いて何ぼアゴ、走つて何ぼアゴで憶えでいねど、戦んどきに困んべしたて言うたつて。

「おらだ、畑さ行くには、どこそこ何ぼアゴ、どこそこ何ぼアゴ、どこそこまで何日肥背負いしたり、桑背負つてきたりすつど、ワラジ何足切れるまで計算して冬のうちワラジちゃんと作つておかんなねんだ。要るだけ。んだから、よくも、ほだごんで、お侍さま、勤まつているんだな」

てだど。ほれから、大変ほの侍が恥入つて、一里さあ何ぼアゴ、六千アゴ。走つて四千アゴで、測つて研究したつたど。四千アゴ行くには、戦のときには何刻かかるつて、時間から何から分つて、百姓に教えらつたつて。

んだから、百姓は馬鹿だ馬鹿だと思つたらば、とんでもない、よく考えつたも

んだっただ。

15 百姓と壁屋

472

共同浴場で、百姓と壁屋がいつのまにか論判になったんだど。

「いやあ、あの塗り方だら、商売だも、おらだにかなわね」
て、壁屋いうたど。

「いや、塗り方、塗り方たつて、畔ぬりあ壁屋に負けらんね」
て、いつのこま（いつの間にか）に、論判になって、んだらばというわけで、
田んぼで、上畔と下畔に別れて畔ぬりくら、はだつたつて（始まつたつて）。ほ
して、

「お前だ、助手つけてもおれぐらい塗らんねべ」
て、ヒドロ田で。ほしたれば、

「ほだごどない」

ていうわけで、壁屋、泥ずうつと拵えで行つて、ほいつ助手あ、持^たつて渡したの受取つて塗り、受取つて塗りした。百姓は鍬でパタパタ、パタパタ、ひっくりかえして行つて、たつたて叩いて、ツウーと塗る。壁屋二人して半分塗らんねがつたつて。

んだから、物によつては〈商売は道によつて賢^こし〉で、〈モチはモチ屋〉だなあて、壁屋も百姓さ頭下げだつたてだな。

どんぴんからりん、すっからりん。

16 無筆の知らせ

473

あるところに、とっても年寄りば大事にする家あつて、んだげんど貧乏で、貧乏で、

「今年の正月、なぜして年取ったらええか」

て、

「まず、こりや、餅も搗いて、じんつあさ食せらんねようだし、新巻も食せらんねし、困ったもんだ。ほんでは何とも仕様ない、裏の櫺売れはあ」

て、こうなったわけだど。

ほして、櫺の木、庄兵衛さんという人さ売ったど。ほしたけあ、四両二分だったど。四両二分で売って、ほいつでいろいろなもの買ってきて、盆と正月して親父さ御馳走したれば、親父は耳きこえねがったずも、ほれ、今だと字書いてもするいっただげんど、昔は字ないんだし、ほとんど通じねがったど。手まねでは分んの分っけんど、分んねな分んねがったずも、ほれ。

ほしたけあ、親父は今迄にない正月したもんだから、ふしぎして、息子さ、
「何かしたか」

てきいだんだど。

んだもんだから、ちよんちよこの毛抜いて焼いてみせたど。したら、

「ははあ、裏の櫓売ったか」

て言うたど。

「ほだ」

「誰さ売った」

て言うから、今度、下りまえ向いて、下の方向いて、小便たつでみせだずも、ほれ。

「ははあ、下の庄兵衛さ売ったか」

「んだ」

「なんぼで売った」

こんど、きんたま、べろつと出して見せだつて。昔は、四寸二分でもあり、四両二分でもあつたど。

「ははあ、四両と二分か、五両はすつど思った、安いがつたなあ」

ていうたど。親父よ。ほしたれば、嫁はよ、尻腰といて、出してみせたど。

「ははあ、孔あいだったか、キズものだか、んでは安いっだな」

ていうたって、はじめて納得したったど。
どんぴんからりん、すっからりん。

17 目なしという魚

474

ある百姓の人が、百匁ローソク拾ったったど。何だかわかんねえし、ほこらこ
こらで一番知ってる人は、お寺さまなもんだから、お寺さまさ聞き行ったど。

「こういうふうな、拾った」
て。

「はいつあ、きつと目なしという魚だ」
てだど。

「かあ、魚か、あいつあ」
見たことないんだずもはあれ、

「んでは、御馳走になれ」

というわけで、刺身して御馳走なったわけだど。

「何だかうまくないげんど、こりや。魚でいうから」

というわけで、ほしたけあ、お寺さまさ行つて、

「何だて、生臭くも何ともない魚で、あつじえげだな、おかしげな、ポクラポクラて……」

というたど。

「骨一本あつけ」

てだど。ローソクの芯。

「はいつあ、何^{なん}たけ」

「くたくたすつけ」

「はあ、なんだべ」

「木綿糸みたいな骨だけ」
というたど。

「ほんでは、ローソクだ、ほりや。目なしていう魚でない。ローソク、お前だ食つたんだ」

て、お寺さまよ。

「ほんでは、ローソクざあ、火とぼすもんだ。腹の中さ行つて焼けたりすつど、なんねから皆水さとびこめ」

ていつて、寒中みな川の中さ、じゃぼじゃぼ入つたていうなだな。

どんぴんからりん、すつからりん。

18 めくらとつんぼ

475

あるどこえ、めくらとつんぼいだつけど。

ほの、めくらが、夜提灯かりに来たんだど。

「ちようちん、貸してけらっしゃい、ちようちん貸してけらっしゃい」

て。

「なんだ、お前、めくらのくせして、ちようちんなていらねべな」
ていうたんだど。

「いや、んでねんだ」

「なして」

今みたい、ほれ、ここに蛍光灯だ何だて、電柱さついでいっど、明るくて何ともないげんど、昔、くらやみで歩ったりすっど、目明きはぶつつかつてなんねがったど。んだから提灯持^たって歩くと、ぶつつからねがったずも、ほれ。んだから、

「目明き、ぶつつかつから、おれあ借りんなだ」
て、いうがったど。

あるとき、こんどは、ほれ、つんぽだど。つくづく鶏ば見っだけあ、
「よっぽど日長くなっただなあ」

てだど。鶏、コケコッコー、コケコッコーで鳴いだなば、アクビしたと見ただずも、ほれ。んだから、日長いから退屈してアクビすんだて見たど。ほい
つば…。

やつぱり、当り前の目の見える人、耳の聞える人とちがつて、つんぼとめくら
ていうな、とんなどこでちがつた見方するどこあるもんだてだど。

19 司馬温公と韓信

476

むかしむかし、支那の国で、支那ざあ大きい瓶さ水汲んでおかつたど。ほし
て餓鬼べら遊んでいるうち、一人の餓鬼が木から落つて、その瓶さ入ってしまった
たど。水いっぱい汲んでだな。かまわねでよくと死ぬていうなで、みなでワイワ
イ、ワイワイていうんだげんど、誰も仕様なかつたど。

したれば、ほれ、一人のちっちゃこい餓鬼つこは、大きい石もつてきて、ほの

石で、ドイドイて叩いて、ほの瓶破つて、ほして助けだつて。後に司馬溫公という人になったんだげんど、ほの当時〈瓶割り溫公〉ていうたつたて。

ほれから、韓信という人いで、支那に。ほしてほれ、友だちといろいろ論判して、

「お前は間違っている、おれから負けたから、おれの股くぐれ」

ていわけで、股くぐつたつたて。して、その人が後にすばらしい兵法家になつたつて。決して無理押しは駄目なもんだ、世の中は、短気おこして無理押しは、駄目で、やっぱり人の股くぐるような寛大な氣持もたねどだめなもんだて、戦なていうのは、必ず無理がつきものだから、ほの、無理すねで、好機に投じてやるのが本当の兵法であつて、あるいは時と場合には頭下げるのなの、苦にしていらんねていうわけで、韓信の股くぐりていうて有名な話だつたていうなだな。

どんぴんからりん、すっからりん。

20 義経の毒矢

477

義経が平泉で殺さったのが事実だかも知んねげんど、人々のうちでは、義経が北海道に行き、樺太まで行つて、ジンギスカンになつたていう、噂まであつて、その裏付けとして、こんな話がある。

北海道のアイヌが、義経に習つたていう毒矢だていう、毒矢の製法が今でも生きてゐるんだど。はいつは何だかていうど、トリカブトの毒矢で、いろいろな毒合せて、効くか効かねか、試すには河原で試したんだど。河原の石さ尻、したえで（腰おろして）、舐めてみっど、ストンと神経やらつで倒つて、水がぶがぶと呑むと、ほんで薄まって生き返えんだつたど。んだから、はいつ舐めてみて、ほいう風にならねど、はいつが熊さ効かねていうことで、罌熊やつつけるにはそいう風な毒矢の試す方法を義経が教えたんだということを、かたくなにアイヌだも語つていつかつたていうんだな。どんぴんからりん、すっからりん。

21 こたつの由来

478

むかしむかし、日でりつづきで、日でりつづきで、田、みな割つてしまつてはあ、
稲は葉っぱしおっではあ、いま少しで枯つてしまふようになったたつたど。どこの
村でも、ほれ、雨乞いで、そっちのおやしろさまだの、こっちの天神さまだのさ
お詣りに行つたつたど。

ところが峠までさしかかったれば、何だか人間でないような、あつちからそろ
り、そろりと来たつたつて。ほしたけあ、

「これこれ、百姓、雨欲しくて歩くなだか」
て、こういうわけだど。

「いや、雨欲しくて何とも仕様ない。死ぬか生きつか分んねなだずはあ、雨降ら
せてもらわんねべか」

藁をもつかむような気持で、頼んだど。

「よし、今から、おれ、雨降らせてやる」

ほしてほの年は、また、暑くて暑くてなんね年だったど。

「んだらば、雨降らせてもらった他に、つうと涼しくしてもらわねべか」
ていうたれば、

「よし、今から雨降らせて、涼しくやる」

ていうわけだど。ほうしたれば一天にわかにかき曇つて、なれ、雨あ降つてきたわけだど。

「いやあ、すばらしい雨だ、涼しくなった。つうとさらさらイボ出るほど、小寒くなつたはあ」

というわけで、みんな喜んでいたけど。ほんで、

「あなた何さまだ」

て聞いたらば、

「おれはタツだ」

てだど。

「ウの日からタツの日さかけで降る雨は長く続くげんど、なかなか暦のめぐり合

せで、ウ・タツさ掛からねから降らんねくていざげんど、ほだえお前だ欲しいご
んだら、降らせてやる」

て、降らせて呉だわけだど。

「ウタツさまで、ござったつたかす、ありがとうございます
ていうたど。したらば一人の百姓は、

「あの、まずウタツ様、ウタツ様、涼しくして雨はもらったげんど、冬のさむい
のにも、おらだまいっているなだ。なぜか温かくしてもらう方法ないもんだべか」
ていうたど。ほしたらば、

「ある」

ていうたど。

「あなた、されんべか」

「いや、おれあさんねげんど、せがれささせる」
ていうたど。

「せがれ様ざあ、何でござる」

ていうたれば、

「タツの子だから、コタツだ。コタツに温かくさせる」
てだど。そんでみな納得してもどつてきたんだど。

どんぴんからりん、すっからりん。

22 灯籠の由来

479

もと〈灯籠〉ていうのは、灯台だったていうのだな。

関西あたりの浜辺で雑魚とりに行くと、帰り遅くなつど、奥さん連中だ、カガリ火焚いて、「ここさこい」というわけで、その火頼まつて男衆だもどつたもんだ。

ところが、平まえさ焚くど風吹つとばされる、何だて、だんだえ洞窟みたいなさ焚くようになったど。石のほこらみたいなさ焚くようになったど。石のほこらみたいなさ焚くようになって、あるいはそういう所ないようなときには、囲うよ

うにしたのが、丁度石屋が見つど、あいっぱ家の前あたりき置くど、ええでないかということ考えて始めたのが、《灯籠》のはじまりだど。ほしてはいつが墓前灯になり、雪見灯籠になったつていうんだな。

たまたま、この、ある侍が刺客に夜ねられつていだったていうわけよ。ところがほれ、刺客が来たらば、夜、中庭にきてみたれば、伏兵がいっぱいいで、入らんねていうんだど。笠かぶつていたのが、坐つて、じいっと動かねでがまんしていんが、ほっちこっちに見える。その他にもいたように見えてなれ、

「へえ、こんではとても駄目だ」

ていうわけでいるうちに、その日は小雨で、笠かぶつたないと見たわけだど。ほのぼのと明け方になってはあ、殺さねでもどんべと思つたれば、そいつが雪見灯籠だったてだな。

そんで灯籠で、とつても縁起のええもんだて、んだから、屋敷さは雪見灯籠つくつたり、何かいするもんだど。こいつは石屋さんの話だな。

23 万蔵さん

480

ここの万蔵さんつあ、字の読めね人だったど。んだげんど、字読めねて人に馬鹿にされんな嫌^やんだくて、新聞なの買って見て歩っかったど。

ほしたば、たまたま、新聞さかさに見つだったて。

「お客さん、新聞さかさだ」

て教えた人いだど。

「う、お前さ見せつだんだった」

ていうたど。はいつにはまいったたど。

むかし、刈田領、七ヶ宿が三年に一度、四年に一度不作続いて、ほして不作ていうど、必ずこつちの方さ、若い女衆降つてきた。ほいつば〈降り女くだめ〉なて言うたり、〈下り女さがめ〉なて言うたり、〈下女〉なて言うたり、いろいろ言わつたそうだが、げんども、やつぱり十三、四から二十三、四ぐらいまでの女性が一番抵抗なく各家庭さ、まず奉公人、子守として入れる状態だつたていうんだな。んだから、ほの檜下の村はずれのある一軒家に、若衆一人ばり住んでいた家あつたんだど。

ほこさ、夕方とんとん、とんとんて戸叩く、はいつ出てみれば、ほれ、きれいな着物きて、若い娘が立つてて、

「何とか一晩泊めてけらっしゃい」
「何とかわけだけど。」

「いや、おれ一人ばりだから、駄目だ」
て、ほの若衆はことわつたんだど。んだけんども、ほれ、何とか何とかて頼ま

れるもんだから、まずはあ、結局は上げることにしたんだけどはあ。んでほの七ヶ宿っていうのは、やっぱり不忘山というところさ霧押すようになってくつど、こっちでも刈田押したなていうて、刈田雪押す年是不作ていうたもんだもな。んでほの、磐上越えに、こっちの方まで霧押すくらいな年は、七ヶ宿は米採んねがつたんだど。ほして南蛮鳥ていうて駒鳥鳴くようになって来つど、とにかく七ヶ宿では、

「ああ、また〈降り女〉に行かんねがはあ」

て、女衆だ語ってるなだったて。して、御領主さまから、命令でみな若くて行がんだてええのは、腹大きいとか、乳飲み児いたとか、そういう人以外には、若い女衆はみな班作って、村々さ入んなだったど。そういう時期がどのぐらい続いたか分んねげんども、そういう一時期があつたらしいんだね。

ほして、ほの、なんぼワラビ出たって、採らねワラビ塚ていうのがあつたて。

それはほの不作の時に、子どもでも掘って、飢饉をしのぐように、一番条件のええどこさ、ワラビとらねで、ふだにしておいて（多くしておいて）ワラビの根っ

こ掘って、ほいつで団子拵えて食ったり、餅搗いて食ったりするために、ワラビ塚というな、どこの部落でも残しておかつたて。そのぐらい食料がひどいので、まず、楢下のある家さ来たつたて。

ところが、ほれ、朝げ早くから起きて働く、寒いとも思わねで、せつせせつせで働く、いつのこまえにその家さ住みつくようになっていだって。ところがふしぎなことに、夜なつてくつど居ねんだど。ほしてふしぎなことが、ほの、この部落に起きだつていうのだどな。ほいつあ何だかというど、若い男衆どこさ夜行つて、若い男衆が脂汗かいて、夜うなされるんだど。うんうんてな。ほして、見てる夢が、ほこさきた女が、きれいな顔で、にこにこ、にこにて笑つて、こちよばさつたり（くすぐられたり）、何かえされっけんど、逃げらんねし、動かねんだど。ほうして、苦しい声上げて、汗びつしよりかいてしまうどはあ、その人は駄目になつてしまふんだど。

「今日、下町のだれのどこさ出たど」

「こんどは、新町のだれそれ、かからつたど」

ほりや、上町の若い衆で、若い衆ばかりだずも、ほいつあ。ほして（ゆき女）て恐れらっでいだんだったど。ところが、立春もすぎではあ、豆まきも終つてはあ、まずみんなして、悪魔だから追い出せ、豆まき、ねつづくしろなてして、立春も終つて、すばらしくその家の裏さ雪崩ついたんだど。ほうしたれば、

「おれ、温かいなきらいだ」

なて言い言いしつたんだけど。ほの娘がよ。ほしてなんぼしてもアンカンざあ抱かねがつたんだけど。

朝げ行つてみたれば、着物の千切つた跡あつたんだけど。ほしてはあ、雪崩と共に居ねぐなつたんだけどはあ。ほしてふしぎなこともあるもんだなあて、いろいろ後で語つたんだげんども、結局、男衆が駄目になったのも、自己暗示さかつたみたいに、七ヶ宿が不作んどきあ、ここらも不作で、栄養不良さかつたんだべえという話と、ほの女は実際にいた人でなくて、おとら溺さ入つて死んだ女が、化けて出たんでないかて語つたつたつて。つとめひどくて、川さ入つて死んだ、七ヶ宿から来た女がいだんだったど。そのおとらが出たんでないがったがてもい

うたもんだど。

どんぴんからりん、すっからりん。

25 まえたけ

482

まえたけっていうのは、うれしくて踊りおどつから〈舞いたけ〉だって。踊りおどるほどうれしいから、そういう名前ついたんだど。

笑いたけて言うな、何^{なえ}ったて、おもしろくなつて、おもしろくなつて、仕様なくて、笑わんなねて。笑いたけには〈大わらいたけ〉と〈小わらいたけ〉であるつて。

先に、殿^{せん}さまさ、笑いたけ、秋さかとして干しておいて、挽き臼でひいて、粉にして、春先、はいつ持つて行つて、その城の殿さま笑ったことない殿さまだったから、いつかその殿さまば、何とかして笑わせてみっだい、笑わせてみっだい

て、みんな考えていたげんど、一言も笑ったことないがったて。

「はいつ、んだらば、おれ行つて笑わせてみんなべ」

ていうて、笑いたけ持^たつて、城さ行つたど。最初、関所みたいなところで門番が、

「どさ行ぐ」

て、しらべられたど。ほしてつどほこさおさえらつて、

「お前、何と名付った」

とか何のて言わつて、

「こんどいうぞう」

ていうど「今言え」なて言わつて、荷物いきなり降して、「今きたよ」ていうたら、「今きたな、わかつてる」ていうたど。〈今〉ていうな姓で、〈きたよ〉ていうのは名前だったど。

ほこさ、さじ一つの笑いたけ、おっぱらまわすと、役人がウフフ、アハハ、アハハて笑つて、何とも仕様なくて笑つたどこ、すすいと中さ入つて行つて、殿

さまさ、

「まだ笑ったことないそうだげんど、笑わせにきた」

というど、

「んだら、よう笑わせてみろ」

というわけで、ほこさ腰元から何から、露払いから皆いたどこさ行つて、風の吹き見て、笑いたけ吹つとばしてやつたど。んだど殿さま、ほれ、ほいつ嗅ぐなり、ウフウフなていだけあ、だんだえ笑い出すのつだなはあ。ほして御褒美もらつて来たつけど。

26 夜 這 い 話

483

あるどこのじんつあ、若いとき、お寺さまには女中さんがいだわけだったのだなねえ、ほの女中さんさ夜這いに行つて、ほしてはあ、うとうとと眠つてしまつ

て、お天道さま上がったんだけどはあ。

かならず出はってくるにや、座敷通って出はらんなねわけだど。んだど、座敷ほれ、お寺さんみな起きてから通って出はるわけに行かねから、

「困ったことはじまった」

と思つたら、ほの女中、掛け布団さ、くるくると巻いだけあ、持^たって、干すふりして、表さどいら投げらつだつたていうんだな。

別な人が、年中行つてるもんだから、お寺さまの、何あどこにあつかまで分つかったはあて。法事菓子茶筆筒さしまつておくこと分つかつたずも、ほれ。夜這いに行く前に、法事菓子御馳走なつてから行くがつたど。

その分家のじんつあは、へうさぎ^て名付けらつだつたなて。お寺さまのきざはしの脇に相当高い石段ある。あそこお寺さまに追^おわれつど、あそこから飛び降りるんだずも、めんどうくさいから、ぴよこんと。

「あらら、怪我しねべがあ」

て、村の人だ、行つて見でつかつたど。んでも次の日なつど、また来つかつたから、まだ追つて行くど、ぴよこんと、また飛び降りるんだど。ほんでへうさぎて名付けらつたんだど。

宝沢（山形市）あたりから、人世話なんていうのがいて、口銭こうせんとりして歩くがつたど。糸とりにきて仲よくなつど、表で咳ばらい二回すつど、誰、三回すつど誰どかて、唯も出てこらんねから、水投げて、水汲みのふりして出はつて来つたど。手桶もつて、下町のゴロの水汲みに行くふりしたもんだど。

27 鬼六ばなし

484

むかし、ほれ、川が氾濫して、毎年毎年犠牲者出たり、橋流さつたり、畑流さつたり、橋一つあつどええげんど、ていうていだつたど。

んで、ほの、大工さんが頼まれるわけよ。その大工さんがなんぼ掛けても流さつで、流さつで何とも仕様ない。したれば、ほの鬼が、

「おれ、かけてける」

ていうたど。して、最初鬼にかけてもらつて、代金払わんなねわけなんだな。

ほの大工さんが、ほしたら鬼が、

「おれの名前あてつど、錢いらね」

ていうわけだど。んだどほれ、なんぼしても大工さんが知しやねもんだから、名前言^やんねわけよ。ほだえしてるうち、支払いの期限、だんだえ迫ってくるわけだ。んで、はいつ支払わねうち、ほの橋なくなつど、せつかく大工さんに掛けてもらつたていうな、村の人たちありがたく思つてだな、ほいつがいっぺんにしうまくなるわけよ。

ところが、ある時、子どもらの〈わらべうた〉聞いたれば、その中さ、

おらが村の 鬼六さんが：

ていう唄の文句があつたど。んだどその鬼の名前わかつたげんど、

「鬼八だ」

「んねえ」

そして次々に、別な名前いうて、最後に「鬼六さん」ていわつではあ、鬼は山さ逃げて行つて、橋だけが残つたんだけど。

どんぴんからりん、すっからりん。

28 眼 の 薬

485

むかしむかし、どこの村でも眼病ていうな流行^{はや}つて困つたつたて。

どの部落であつたか、おつつあんが眼病になつて、眼真赤になつて、ほれ、ピリピリて痛くてなんね、見えねえし、まず仕事も禄だま（ろくに）さんねくて、困つたもんだ。

「こりや、一つ、町ちや行つて薬でも買つて来んなね」

て、上の山さ行つて、眼病の薬買つてきたわけだ。薬買つては来たげんど、家さ来てみたれば、なぜして点けっかわかんねわけだ。見たれば、目悪いから見えね。

「かか、かか、まず、なぜして点けっかわかんね。なぜ点けっか、書かつたげんど、わかんね、こりや。お前、読まんねが」

「おれも、いろはかるた、したことあつけんども、みな憶えていねまなあ」

「はあ」

二人して読んでみたれば、〈尻につける〉だけは、尻の方だけは読んだど。上方の字、何^{なえ}つたて読まんね。そしたれば、思い出したど、二人は。

「はあ、上の山のお湯さ入つたれば、男湯、女湯ていう、女の家だ、こいつあ」女^なの草書だ、〈め〉ていう字は…。

實際は〈め尻につける〉て書いてあつたんだげんども、〈女^なの尻につける〉て読んだずも、ほれ。ほして、

「かか、かか、女の尻につけるて書がつた」

「ほだなあ、こいつあ、女の尻だな、昔から言うたもんだなあ、アカメ、ケツツカいて、こりや、赤目になつど、尻かくなる（かゆくなる）。おれあ尻などかぐないげんども、おれの尻さつけておどつつあの眼治んなだべか、ふしぎなもんだ」

「いや、んだげんど、書かったことは、して、みんなね、裸になれ」
「まっぴるまから」

てんのひるまから裸にならんかねわけだずも、尻さつけるには。女の尻ていえば、家には、かかしかいねもんだから、

「ようし、んでは、かか点けんぞ」

ていうわけで、裸にして、もそもそてつけはじめたど。ほうしたれば、こちよびたくていらんね。腹さ力入つだれば、牛蒡食つたか何だかわかんねげんど、一発やらかしたずま、ほれ。ボオーとやらかしたど。ほしたればバァーッとやらかしたれば、吹つとんで薬みな目さ入つたて。ほして眼病治つたつたど。

どんぴんからりん、すつからりん。

あとがき

上山市榎下の佐藤孝一さんのところに、二月十一日に訪れた。その折に、佐藤家にずっと前に奉公していた方を呼んでくれていて、祖父に当る権六氏の、「語りぶり」を思い出してくれた。以前に孝一さんから聞いた権六氏の語りぶりよりも、もっとたのしい思い出になっているように見えた。それほどの語り手権六氏を祖父にもった孝一さんは、すばらしい語り手になる必然性を家系的にもつていたということになる。

佐藤家の昔話はこの『佐藤家の昔話・第十集』をもって、四八五話になった。その他に第九集に二話の世間話があるから、その数は気の遠くなるような数である。しかしこれをもって佐藤家の昔話は終了したものではない。その上で、記憶がうすれたために筋書きのみになってしまったものもあり、榎下部落の「通過儀礼」も中途までしかきいていない。それらもぜひ今後の課題として、考究して行きたい。

大変さいわいに、講談社の好意で、佐藤家の昔話の中から、百数十話をえらんで編集したものが出版されることになった。これで、いろいろな意味で、昔話伝承に興味があり、重要な解明のカギになることがらの、ほんの一部ではあるが、全国的に紹介されることになったことは、ともかくうれしいことである。

この十集まで、佐藤孝一さんはもちろん、佐藤家の御協力がなければ、とうていここまで出来なかったであろうし、昔話研究の世界的権威たる関敬吾先生はじめ、大島建彦先生、稲田浩二先生や福田晃、野村純一先生、地元の戸川安章先生、江田忠先生、奥村幸雄先生、それに須藤克三先生はじめ児童文学の松谷みよ子先生や大川悦生先生、さらには同僚の方々の御協力、そして海老名ちゃん、近きよ、高橋しのぶ、川崎みさをの各話者の方々の尻おし、とんと昔の会、山形民話の会の方々などが頭にうかぶ。まだ佐藤家の昔話はまだまだお聞きできる予定であるが、ガリ版第十集をふりかえって、一くぎりということでお礼申し上げる次第です。

山形新聞社の三P賞を受賞する光栄に浴したが、これは県内の話者を代表して、

私が受賞することになったのは、ともかく子ども相手の話であり、時には子どもだましにすぎないとする昔話に文化的意義が認められたことでもあり、大変にうれしいことである。佐藤家はじめ多くの話者の方々に改めて感謝申し上げるものである。

昭和五十一年二月

武田 正

ゆき女

佐藤家の昔話（十）

昭和五十一年二月二十五日 発行

編者 武田 正

南陽市三間通二二二の三

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

ゆき女 佐藤家の昔話(十)

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十三年七月三十日

東北文教大学短期大学部民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

東北文教大学・同短期大学部附属図書館内

(電話)〇二三―六八八―七五四四

- 『西川町の昔話』(一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊)
『むかしあったけど』(一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊)
『米沢市築沢の昔話』(一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊)
『米沢市塩井の昔話』(一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊)
『安楽城の伝承(一)』(一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊)
『安楽城の伝承(二)』(一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊)
『安楽城の伝承(三)』(一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊)
『高畠町和田の昔話』(一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊)
『及位の昔話(一)』(一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊)
『及位の昔話(四)』(一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊)
『及位の昔話(五)』(一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊)
『佐兵ばなし』(一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊)
『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話(一)』(一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊)
『かっぱの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』(一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊)
『行けざんざん 小国町昔話集』(一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊)
『お婆の手ん箱(一) 阿部キヌオさんの語り』(一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊)
『及位の昔話(二)』(一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊)
『及位の昔話(三)』(一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊)

- 『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』(一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』(一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続々牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』(一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『牛方と山姥(四) 海老名ちやう昔話 第四集』(一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『飯豊町昔話集―大平・新沼・高畑―』(一九七一年九月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『蛇むこむかし しらたかの民話』(一九六六年二月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『お杉お玉 小国町昔話集(一)』(一九七〇年二月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『さとりのお化け 小国町昔話集(二)』(一九七〇年八月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『鬼と豆のくいくら 小国町昔話集(三)』(一九七〇年十月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『田の中の田三郎 近きよ姫昔話』(一九六九年八月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『お糸唐糸 故安部忠内翁／安部はつよ姫 米沢の昔話集』
(一九六九年九月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『つゆふじの伝説 安部忠内・稿』(一九六九年十一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『さるむこ 田沢の伝説と昔話』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『ちようじやのむこ』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(上)』(一九七〇年十二月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(下)』(一九七一年一月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『木小屋の生活 民話序説』(一九七二年四月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『カマイタチ 東根昔話集2・置賜昔話補遺』(一九七二年五月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『川崎みさをさんの昔話』(一九七九年一月発行、二〇〇九年七月再刊)

『なら梨とり 赤湯の昔話』(一九六七年一月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜平野の昔話(一) 民話のころ(対談) 浜田広介先生と海老名ちやうさん』

(一九七一年四月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜平野の昔話(二) 海老名ちやう昔話補遺』

(一九七一年八月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『たかみねと秋田の昔話』(一九七八年二月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『佐藤家の昔話(一) 山形県上山市檜下』(一九七二年七月発行、二〇一〇年七月再刊)

『鳥吞爺 佐藤家の昔話(二)』(一九七二年九月発行、二〇一〇年七月再刊)

『鉢かつぎ姫 佐藤家の昔話(三)』(一九七二年十二月発行、二〇一〇年七月再刊)

『天とひばり 佐藤家の昔話(四)』(一九七三年三月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『へらへら話 佐藤家の昔話(五)』(一九七三年七月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『夢のほたる 佐藤家の昔話(六)』(一九七三年十一月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『ぬるくす男 佐藤家の昔話(七)』(一九七四年十月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『蛤姫(上)(下) 佐藤家の昔話(八)』(一九七五年四月発行、二〇一一年七月再刊)

『おとぎり草 佐藤家の昔話(九)』(一九七五年七月発行、二〇一一年七月再刊)

『ゆき女 佐藤家の昔話(十)』(一九七六年二月発行、二〇一一年七月再刊)